

論文概要書

マイスター・エックハルトにおける知性論の研究

——トマス主義と新プラトン主義のはざまで——

若松功一郎

本博士学位請求論文（以下「本論文」）の主題は、13 世紀～14 世紀にドイツで活躍したドミニコ会の思想家であり神学者であるマイスター・エックハルト（Meister Eckhart/Eckhart von Hochheim, 1260-1328）の思想を、彼の説く「知性」（intellectus/vernunft）という概念から検討することである。以下、現代における研究状況に照らし、本論文の概要を簡潔に述べる。

マイスター・エックハルトは、13 世紀～14 世紀ドイツで活躍したドミニコ会の思想家であり、神学者である。代表的研究者である Largier は、1980 年代以降におけるエックハルト研究の主要な動向を、扱う主題によって大別している¹が、このうち本論文は、エックハルトの思想史的源泉をドイツ・ドミニコ会の伝統に求める研究に属するものと言える。

ここで言うドイツ・ドミニコ会とは、アルベルトゥス・マグヌスの創設によるケルン高等神学院（studium generale）を中心とした、ドイツにおけるドミニコ会内部の知的雰囲気を共有した一群の人々を意味している。このドイツ・ドミニコ会の思想についての学術的検討は、古くは 1936 年に刊行された Grabmann の著書に端を発する²のであるが、この種の研究が本格化した背景には、1977 年から刊行が開始された『ドイツ中世哲学全集』（*Corpus Philosophorum Teutonicorum Medii Aevi*）全 32 巻の影響、および Libera による概説的な研究³の成果が存する。

研究史上、こうしたドイツ・ドミニコ会の思想伝統とエックハルトとの関連が注目された背景には、主に知性論の領域における問題が存在する。エックハルト思想は、彼の死後 1329 年、教皇ヨハネス 22 世によって、異端または異端の嫌疑が濃厚なものとして断罪されてしまう。その際問題となった事柄の一つが、人間知性を「魂のうちにある一つの力」と呼び、この力が神を「神自身の根底において」（in sînem[=gote] eigenen grunde）把握するとして、人間知性による現世における神認識を語っているとみなされうる箇所が、エックハルトの著作に存在する⁴という点であった。こうした事情ゆえに、エックハルトにおける知性理解の真意とそれに対する異端断罪が持つ正当性の有無を理解するための鍵となる立場（Schlüsselstellung）⁵として、ドイツ・ドミニコ会の思想、特に本論文でも詳細に扱うフライベルクのディートリヒにおける知性論が研究されたのである。

ドイツ・ドミニコ会における知性論の伝統とは、以下のようなものであった。すなわち、アルベルトゥス・マグヌス、そしてフライベルクのディートリヒに代表されるドイツ・ドミニコ会の神学者たちは、当時アラビア世界を経由してラテン世界へと再輸入されつつあった、『神学綱要』（*Elementa theologica*）、『原因論』（*Liber de causis*）などの新プラトン主義的著作を積極的に受容する。そのことをもって Largier の言う、「アルベルトゥスからフライベルクのディートリヒを超え、モースブルクのベルトルト、ヨハネス・タウラー、ハインリヒ・ゾイゼへと至るところの、様々な観点からトマス・アキナスと区別される知的伝統」（von Albert über Dietrich von Freiberg zu Berthold von Moosburg, Johannes Tauler und

¹ Vgl. Niklaus Largier, 'Perspektiven der Forschung, 1980-1993', in: *Zeitschrift für deutsche Philologie* Bd. 114, herg. v. W. Besch u. H. Steinecke, Berlin, 1995, S.29.

² Vgl. Martin Grabmann, *Deutsche Dominikanerscholastik* (Mittelalterliches Geistesleben Bd.2), München, 1936, S.325-413.

³ Alain de Libera, *Introduction à la mystique rhénane : D'Albert le Grand à Maître Eckhart*, Paris, 1984.

⁴ Vgl. *Pr.10*; DWI, 171, 12-15.

⁵ Largier (1995), S.44.

Heinrich Seuse führenden intellektuellen Tradition, die sich in verschiedener Hinsicht von Thomas von Aquin abgrenzt) ⁶がドイツにおいて生ずることになる。そして特にディートリヒの場合においては、本論文第 2 章において検討するとおり、知性論において明確な非トマス主義的傾向が打ち出される。Mojsisch や香田⁷によってすでに指摘されているとおり、この種の非トマス主義的知性論の伝統は、異端断罪されることとなったエックハルトによる知性論に確実に影響を及ぼしていると考えられる。

エックハルトの知性論をめぐる以上の研究状況を踏まえて、本論文の課題をまず要約的に述べるならば、それは、ディートリヒ的知性論の影響を考慮したうえでエックハルトのテキストを再読することによって、いわゆる「本質的始原論」を中心としたエックハルト思想をドイツ・ドミニコ会の系譜に連なる知性神学として再読解し、そこから翻って、人間知性の存在性格や神認識における人間知性の働きに関するエックハルトの理解を解明することである。

エックハルトにおけるディートリヒ的知性論からの影響を論ずる際にまず重要であるのは、エックハルトのいわゆる本質的始原論におけるディートリヒ的知性論の影響である。エックハルトの本質的始原論とは、「始原」(principium) と「始原から生みだされたもの」(principiatum) という対概念を用いて、神的三位一体における位格的誕生と、神による被造的世界の創造とを同時に説明しようとする、エックハルトの思想の中核を為す理論である。しかしこの本質的始原論は、海外では先述の Mojsisch⁸、本邦では田島⁹による指摘にあるとおり、ディートリヒによる「本質的原因論」と呼ばれる理論の影響下に成立している。こうした観点のもとにエックハルトの本質的始原論を再検討した場合、この理論は、ドイツ・ドミニコ会におけるいわば急進的な知性神学の系譜に連なるものとして再読されうる、と本論文では考える。

具体的に述べるならば、第 1 章において示すとおり、神的知性や神的知性に抱懷される理念の存在が、それらが知性の外部に存在する諸事物の存在の原因であることを理由に、知性外の諸事物の存在よりも存在論上卓越する、という新プラトン主義的主題を、エックハルトの本質的始原論はディートリヒの本質的原因論から受け継いでいる。そしてエックハルトの本質的始原論を、以上のようにドイツ・ドミニコ会的な知性論の影響下にあるものとして理解した場合、この影響は、第 1 章において示すとおり、初期の著作『前期パリ討論集』においてすでに見られ、『ヨハネ福音書註解』において本質的始原論が体系的に述べられることからわかるように、エックハルトの思惟を通じて一貫したものである考えることができる。

ただしエックハルトの本質的始原論は本論文第 1 章において見るとおり、ディートリヒの本質的原因論と比較された場合、その射程に神的三位一体における父と子との関係を含んでいる点で明確な相違を有している。そして第 3 章において触れるとおり、射程におけ

⁶ Ebend., S.43.

⁷ 香田芳樹『マイスター・エックハルト 生涯と著作』(創文社、2011 年)、200-204 頁を参照。

⁸ Vgl. Burkhard Mojsisch, *Meister Eckhart. Analogie, Univozität und Einheit*, Hamburg, 1983, S. 24-27.

⁹ 田島照久『マイスター・エックハルト研究——思惟のトリアーデ構造 esse・creatio・generatio 論』(創文社、1996 年)、23 頁。

る以上のような相違は、『創世記』1:27 やアリストテレス『魂論』(*De anima*) 第 III 巻に対するエックハルトの解釈を規定し、さらに範型と像というエックハルト独自の対概念の使用にもとづき、神的知性と人間知性との関係に関するエックハルトの理解をも規定している。したがって、ディートリヒ思想の影響を受けながらも、決定的に相違するものとして構成された本質的始原論を基盤として、エックハルトは人間知性に関するどのような理解を確立し、またその種の人間知性は神認識を行う際にいかなる機能を発揮するものとして想定されていたのかという点が問題となる。本論文ではこの問題を、またもディートリヒ的知性論からの影響という視点で考察したいと考える。

先述のドイツ・ドミニコ会における知性論がエックハルトに及ぼした影響の程度を 1970 年代から 80 年代にかけて論じたのが、Mojsisch や Flasch 等に代表されるいわゆるボーフム学派 (Bochumer Schule)、およびその周辺の研究者たちであった¹⁰。しかしボーフム学派やその系譜を引く研究者たちが最終的に提出した見解は、再検討の余地を残すものであると考えられる。

具体的にいえばその問題点とは以下のとおりである。第 3 章および第 4 章において詳述するとおり、これら過去の研究において、ディートリヒ知性論がエックハルトの思想に及ぼした影響は、両名の唱えた神の似像としての可能知性 (*intellectus possibilis*) という考えに関してのみ見いだされるとされ、能動知性 (*intellectus agens*) 論に関してエックハルトはディートリヒ由来の影響を被っていないとみなされてきた。ところが、エックハルトの著作を仔細に検討するならば、特に人間知性が日常的な働きを超え、神認識へと向けられる局面において、ディートリヒ的能動知性論の影響が事実看取される。それゆえに、ボーフム学派の見解を再検討することによって、エックハルト知性論におけるディートリヒ由来の影響の程度を再度検証することが、本論文の課題として浮上する。

以上述べた研究状況における本論文の位置づけを踏まえたうえで、本論文の構成を以下に概略的に述べる。ディートリヒが行った原因としての知性をめぐる思想展開として、本質的原因論というものがあり、エックハルトの本質的始原論がこの本質的原因論から影響を受けている、という点は、先述の Mojsisch によってすでに指摘されている。第 1 章ではこの Mojsisch による指摘を批判的に再考し、以下の点を指摘する。すなわち本質的始原論が知性論的観点から検討されるならば、エックハルトは始原の有する存在が被造物の存在に対して卓越している根拠を、始原が知性である点にこそ求めていると考えられる。また一方でエックハルトは、アリストテレス『魂論』のディートリヒ的解釈と、キリスト教に伝統的な「神の似像 (*similitudo*)」論とを根拠として、可能的・無規定的性質をもつ人間知性が神の似像であると理解する。このことによってエックハルトは、知性としての始原が持つ存在が被造物の存在に対しては卓越する一方、ただ神の似像としての人間知性が持つ存在だけは、始原の存在と存在様態を異にするものではないと理解している。

第 2 章においては、エックハルトにおける人間知性による神認識を理解するために欠かせない、ディートリヒの展開した独自の知性論を、主にトマス主義との比較を通じて検討する。トマスが為した理解とは異なり、ディートリヒにおいて人間の知性は、新プラトン主義的な宇宙論における流出構造の一部に組み込まれる。それゆえ、ディートリヒの考える能動知性とはトマス主義的な能力としての知性ではなく、常にそれ自体の本質を認識す

¹⁰ Vgl. Burkhard Mojsisch, *Die Theorie des Intellekts bei Dietrich von Freiberg*, Hamburg, 1977.

ることによって神から発出し続ける、本質上至福 (beatus) な実体であり、神の像 (imago Dei) である。能動知性が有する以上のような特異な性質にもかかわらず、ディートリヒがそれを人間にそなわるものと理解することができた理由や、ディートリヒの理解した能動知性と可能知性との関係について考察する。

第 3 章においては、エックハルトとディートリヒにおける人間知性理解に関するボーフム学派の見解が批判的に検討される。Mojsisch をはじめとする研究者たちは、ディートリヒが展開した実体としての能動知性理解をエックハルトが受容していないとみなし、エックハルト知性論における中心的な理解が人間知性の可能的側面に収斂するとしたうえで、エックハルトに対するディートリヒ知性論の影響点を可能知性理解に限定して考える。すなわち、ディートリヒは人間の可能知性が本性上いかなる形相によっても規定されていないとして、それが神の似像であると理解する。Mojsisch 等の解釈によれば、人間知性に関してエックハルトがディートリヒから引き継いだのは以上の可能知性に関する理解のみであって、エックハルトは人間知性が神からの何らかの働きかけを受容する可能性をそこに読み込んだということになる。以上の Mojsisch 等の解釈は、本論で指摘するとおり、可能知性にのみ限定するならば的を射たものである。

ところが以上の解釈に対して、エックハルト自身のドイツ語著作を仔細に検討するならば、人間知性が知性それ自らを対象とした認識を行うことによって、自らの本質を通じて神の本質を認識するという、ディートリヒの能動知性理解と同様の、極めて能動的な神認識が語られた箇所が多岐にわたって存在する。端的に言って、ボーフム学派の研究において、ディートリヒ的知性論の影響下にあると指摘されるエックハルトのテキスト箇所は、神の似像としての可能知性という考えを語ったものにすぎないのであり、エックハルト知性論は神の像としての能動知性を論ずることのできる、より広範な射程を有している。このように考えた場合、エックハルトが人間の日常的な知性認識を説明するべく採用するトマス主義的な能動知性理解と、神の像として神認識を担う能動知性理解とがどのように両立するのかという点が問題となる。また神の像としての能動知性という理解は、ディートリヒの場合とどのように類似し、或いは相違するのかという点も問題となる。

これらの問題に対して、第 3 章ではエックハルトの恩寵論から解決を与えるを試みる。先述のとおりボーフム学派においてはそもそも、エックハルトにおける人間知性の能動的側面が考察の対象とならないので、これは本論文に固有の試みである。

エックハルトは恩寵 (gratia) という言葉の語源を解釈し、無償で (gratis) 与えられるものとしての恩寵と、神の寵愛を受けたものとする (gratum faciens) 恩寵という二種類の恩寵を想定する。エックハルトによれば、後者の恩寵はただ神の像である限りにおける人間知性のみが有するとされるが、これが意味するところは、神と人間知性との関係が、本質的始原論に準じたかたちで、本来的には三位一体における父と子との関係を意味する「範型-像」関係に則って理解されるということである。エックハルトが神の像としての人間知性を論じる際、そこでは神の恩寵によって強化された人間の能動知性が想定されているとすることができる。

こうした恩寵論的背景を踏まえたうえで、第 3 章では引き続き、エックハルトのドイツ語著作に特徴的な概念である「離脱」(abegescheidenheit) 概念について検討する。この語は人間が一切の被造物への関心を断った状態であると一般に解釈されるが、知性論的な文脈で検討されるならば、人間知性が外的対象との関係性を断った状態を意味しているこ

とを、複数の先行研究を踏まえて述べる。離脱概念をこのように理解するならば、人間知性が日常的な働きを中止し、神の像となるべく恩寵を受け入れる際の或る種の準備段階として離脱を捉えることができる。

第 3 章では最後に、知性のうちに神が恩寵を与えるという事態の内実が述べられた、ドイツ語説教 104 を検討する。この説教では人間知性の為す日常的な働きがトマス主義的抽象理論に則って述べられたのち、それと対比されるかたちで、離脱した人間の能動知性のうちに神の子が誕生するという神秘主義的言説が語られる。先んじて第 1 章において述べるが、エックハルトは本質的始原論にもとづき、三位一体における神の子が、神の知性のうちに先在する一切の被造物のイデア的・範型的理念であると考えている。以上のことを考えあわせれば、説教 104 で語られる能動知性のうちにおける神の子の誕生の教説は、能動知性が恩寵によって強化され、一切の被造物の理念ないし形象を獲得することを意味している。神から直接的に発出し、そのうちに一切の被造物の範型的理念を含みこむ、神の本質を認識しうる神の像としての能動知性という理解は、ディートリヒによる能動知性の理解とまさしく軌を一にしている。新プラトン主義的流出論の一環として提示されたディートリヒ知性論のすべてをエックハルトが受け継ぐことはなかったが、ディートリヒが本性上能動知性にそなわると考えた事柄を、エックハルトは神の恩寵によって能動知性が獲得するものと理解したと言いうるのである。

続く第 4 章においては、神の像としての知性によるこの種の働きを、エックハルトのラテン語著作において登場する「完全還帰」(reditio completa) という概念から検討する。完全還帰とは、新プラトン主義者プロクロスの『神学綱要』がアラビア世界において翻案された著作である『原因論』に登場する概念であり、知性による自己認識を意味する概念であるが、エックハルトはこれを「神の像」(imago dei) としての人間知性に固有の働きとみなしている。エックハルトと同じく「完全還帰」概念を受容したトマスそしてディートリヒの理解について検討し、エックハルトにおける「完全還帰」概念の受容が、トマスのものよりもむしろディートリヒの理解に類似していることを示す。第 1 章で検討する神の似像としての人間知性という理解が人間知性の可能的側面に着目しての言表であったのに対し、この第 4 章で示すのは、人間知性の能動的側面に着目した、神の像としての知性が為す、能動的な働きに関する理解であると言える。エックハルトが想定する神の像としての人間知性は、自己自身の本質を通じて他の一切の被造物と神自身とを認識するとされるのであり、これはディートリヒの能動知性理解を顕著に受け継いだ理解であることを、先述のボーフム学派の見解に対して示す。

最後に第 5 章では、知性の「非被造性」(increabilitas) に関する問題について検討する。アヴィニオンにおいて異端審問委員会が提示した抜粋集、および異端断罪を行った教皇勅書の双方において、エックハルトが主張したという知性の非被造性が非難されており、またエックハルト自身も主にドイツ語説教において、類似した見解を語っている。しかし一方でエックハルトが生前、異端嫌疑に対する弁明として述べた文言や、異端審問に際しての覚書のうちには、知性の非被造性を述べたことを否定する旨の、エックハルトの言葉が記録されている。以上の事情に鑑みて、知性の非被造性にまつわるエックハルトの真意を解釈することが第 5 章の主題である。ここで注目されるのは、人間知性のうちに下るといふ先述の恩寵をエックハルトが「知恵」(sapientia) と呼び、それを存在、真、善、一といったいわゆる「超範疇的なもの」(transcendentia) に準ずる、霊的完全性(perfectio spiritualis)

であるとみなしている点である。エックハルト思想においてこのことが意味するのは、知性或いは知恵が、たとえば壁における附帯性である白さなどとは異なり、基体からいかなる存在をも受けとっていないということである。

このことを指摘しておいたうえで、本論文では次に、アリストテレスが提出した四原因に対するディートリヒの解釈を検討する。ディートリヒは四原因のうち、形相因を内的原因、作用因を外的原因と呼び、形相因が存在者の本質にかかわるのに対して、作用因は存在者の存在にかかわると述べている。ディートリヒによる以上の解釈をエックハルトもまた受容し、事物の本質的な面を考察する形相因的な観点と、事物の存在を考察する作用因的な観点とを自らの思惟のうちに導入する。この区別を行った場合、例えば壁における白さの形相因的原因は白さの形相であり、作用因的原因は塗装者であることになるのだが、先に述べたとおり、霊的完全性である知恵はそもそも基体から存在を受容することがないので、壁を実際に白いものとする塗装者の場合のような、人間を知恵あるものとする作用因的原因は、被造的世界には存在しない。したがって、形相因的にも作用因的にも、知恵の原因は神の知恵ないし知性そのものであるということになる。

最後に指摘するのは、エックハルトがラテン語著作においてしばしば用いる「である限りにおいて」(*in quantum*) という表現である。エックハルトはこの表現について、それが当該の存在者から作用因的観点を除外し、形相因的観点のもとで扱う機能があると述べる。エックハルトは本質的始原論を踏まえたうえで、神的三位一体のいわば内部における事態である誕生や発出と、そこからのいわば外発である創造とを、アリストテレスの四原因を用いて語る。それによれば三位一体内部の誕生や発出は形相的流出 (*emanatio formalis*) であり、そこにおいて機能するのは形相因のみであるのに対し、神以外のものが創造される際には、形相因に加えて作用因も機能しているとされる。

先述のとおり、エックハルトは人間知性の日常的な働きに関して、トマス主義的知性論を採用しており、その際には人間の知性認識が、それによって知性認識が成立する可知的形象を知性が受容することとして説明される。この点において、人間知性は可知的形象によって現実化するのであるから、壁における白さの場合のように、被造的世界にある他の事物に原因を有しているとも言える。ところが、知性「である限りにおける」知性について考えた場合、この種の作用因的な原因は考察から除外され、しかも知性ないし知恵は超範疇的なものと同種のものとして、基体である人間からいかなる存在をも受け取っていない。エックハルトが人間知性の非被造性について述べる場合に念頭に置いていたのは、以上の事柄であったと考えられる。

以上、本論文における章ごとの構成と概要とを述べた。本論文の目的とするところは、ディートリヒ的知性論の影響を考慮したうえでエックハルトのテキストを再読することによって、いわゆる「本質的始原論」を中心としたエックハルト思想をドイツ・ドミニコ会の系譜に連なる知性神学として再読解し、そこから翻って、人間知性の存在性格や神認識における人間知性の働きに関するエックハルトの理解を解明することである。エックハルトは主に人間知性の性格と働きに関してディートリヒの影響を大きく受けながらも、その種の新プラトン主義的—ドイツ・ドミニコ会的知性論を、当時すでに影響力を持ちつつあった、トマス主義的知性論と調和させようと試みていると考えることができるのである。

以上 (本文 8,582 字)